

～東海・東南海・南海地震等の津波シミュレーション結果～

国土交通省港湾局では、東日本大震災の教訓を生かし、東海・東南海・南海地震等による津波シミュレーションを実施し、東京湾から九州に至る主要19港の安全性評価を進めております。

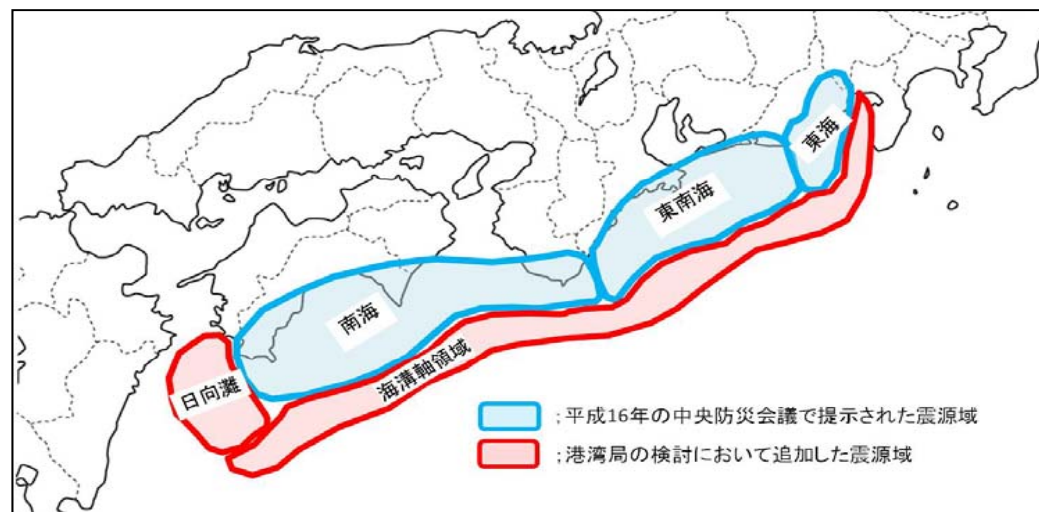
今般、①各港の津波による第一線防波堤の越流、及び②コンテナターミナルの浸水の危険性を分析した結果を、津波に対する安全性の速報値として取りまとめました。

この結果を踏まえ、津波からの防護、被災後の速やかな復旧・復興、災害に強い物流体系の構築などに関する地震・津波対策の総合的な基本方針を近々に取りまとめる予定です。

【最大クラスの津波を引き起こす想定地震】

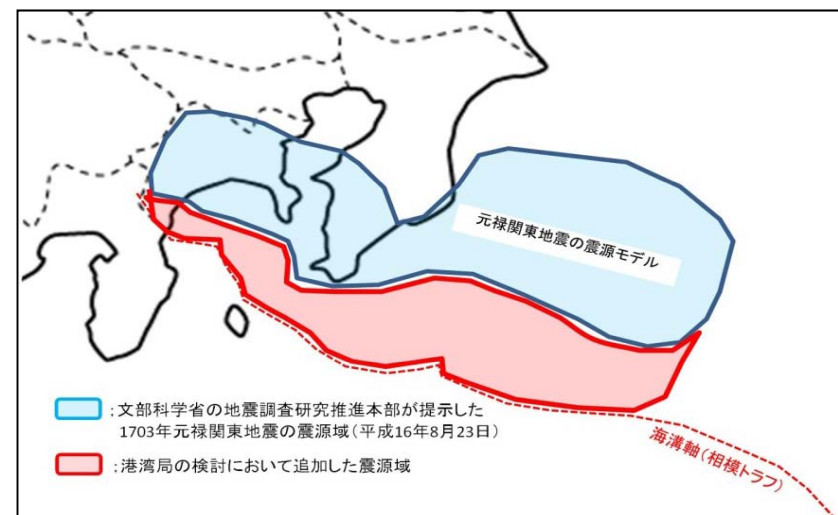
1) 中部地方～九州地方

- ・東海・東南海・南海・日向灘・海溝軸(5連動型)
- ・マグニチュードMw:8.9



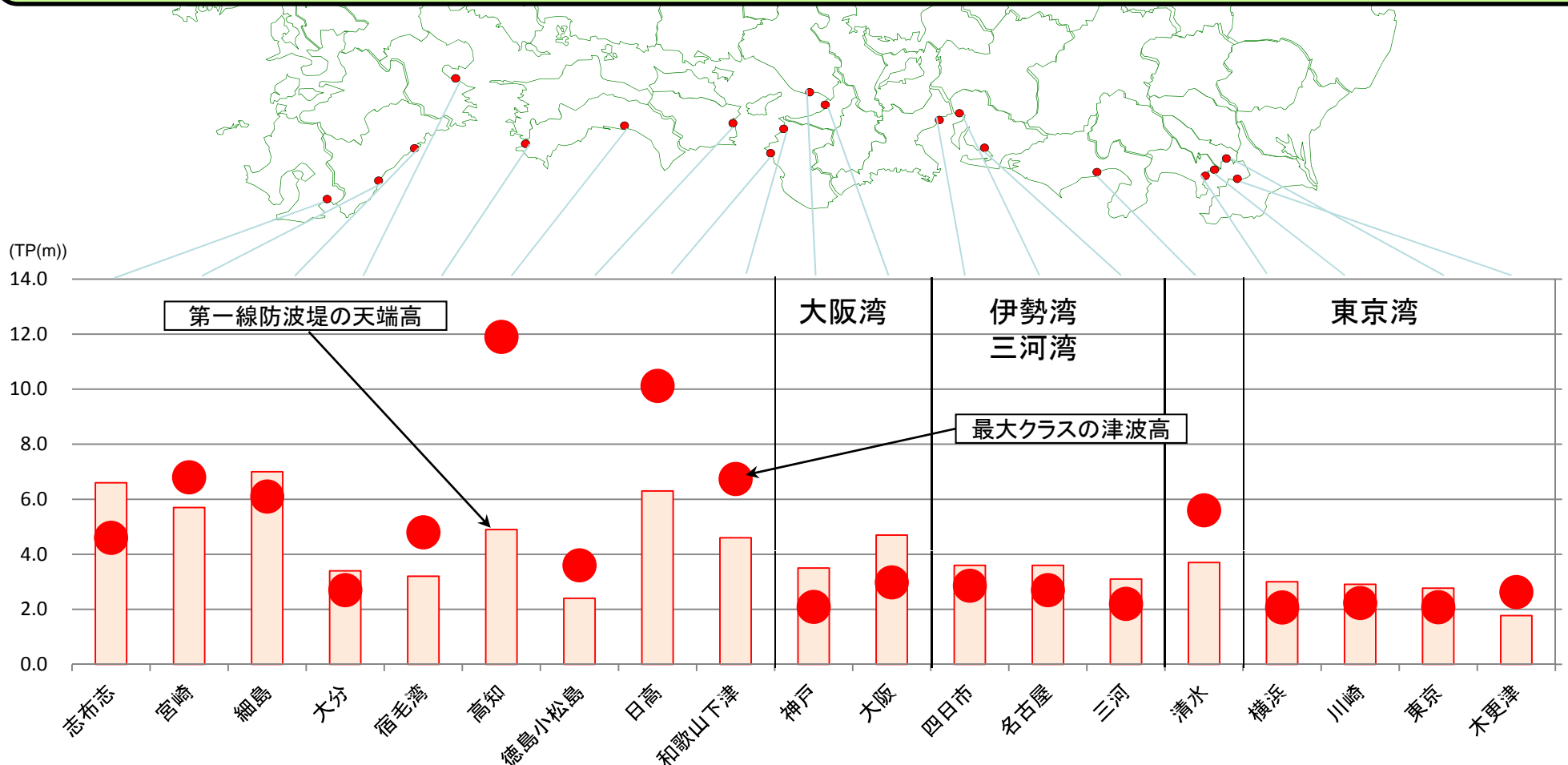
2) 東京湾

- ・元禄関東地震の震源域を沖合の海溝軸まで拡大
- ・マグニチュードMw:8.4



①想定津波高と第一線防波堤の天端高の比較(最大クラスの津波)

外洋に面する港湾では、最大クラスの津波高が第一線防波堤の天端高を大幅に上回り、破壊に至ることが懸念される港湾が数多く見られます。一方、三大湾の港湾でも、地震による地盤沈下を考慮すれば、津波の越流の可能性も否定できません。このため、粘り強い構造とするための施設の補修についての**技術的指針や補強方法などの検討**を早急に進めることとしています。



※ 本結果においては、地殻変動に伴う沈下量は考慮しているが、液状化による沈下量は考慮していない。
 ※ 本結果においては、防波堤の天端高と津波高を比較したものであり、背後地の危険性や安全性を示すものではない。

②三大湾の主要なコンテナターミナルにおける津波の浸水想定

港湾地域を防護する施設の外側に位置するコンテナターミナルでは、津波の来襲による浸水が予想されます。このため、**港湾の労働者や来訪者の安全確保のガイドラインを策定**するとともに、国際コンテナ戦略港湾などでは、**地震・津波に強く、被災後も直ちに復旧可能な施設整備の方針**を早急に策定することとしています。

コンテナターミナル				発生頻度の高い津波 ^{※1}			最大クラスの津波		
港名	地区名・埠頭名	水深	現況の天端高 (TP(m))	沈下後の岸壁天端高 ^{※2} (TP(m))	津波高 (TP(m))	沈下後の岸壁天端高との差 ^{※3} (m)	沈下後の岸壁天端高 ^{※2} (TP(m))	津波高 (TP(m))	沈下後の岸壁天端高との差 ^{※3} (m)
東京港	青海埠頭	(-15m)	2.8	2.1	2.0	0.1	1.8	2.2	-0.4
	大井埠頭	(-15m)	2.9	2.2	1.9	0.3	1.9	2.1	-0.2
川崎港	東扇島埠頭	(-14m)	2.9	2.1	1.8	0.3	1.7	2.3	-0.6
横浜港	大黒埠頭	(-15m)	2.7	2.0	1.9	0.1	2.0	2.3	-0.3
	本牧埠頭	(-13m)	2.5	1.8	1.9	-0.1	1.8	2.2	-0.4
	南本牧埠頭	(-16m)	2.9	2.2	1.6	0.6	2.2	1.9	0.3
名古屋港	飛島埠頭	(-16m)	3.4	3.1	2.0	1.1	2.9	2.2	0.7
	鍋田埠頭	(-14m)	3.4	3.1	1.9	1.2	2.9	2.3	0.6
四日市港	霞ヶ浦地区北埠頭	(-14m)	3.5	3.2	2.2	1.0	3.0	3.2	-0.2
神戸港	ポートアイランド第2期	(-15m)	2.8	2.7	2.0	0.7	2.7	2.3	0.4
	六甲アイランド	(-14m)	3.1	3.0	1.9	1.1	3.0	2.6	0.4
大阪港	夢洲	(-15m)	3.6	3.5	2.6	0.9	3.5	2.9	0.6
	咲洲(南港地区)	(-13m)	3.5	3.4	3.1	0.3	3.4	3.6	-0.2

※1 発生頻度の高い津波は現行の地域防災計画などをもとに個々の港毎に設定。

※2 本結果においては、地殻変動に伴う沈下量は考慮しているが、液状化による沈下量は考慮していない

※3 津波高が岸壁天端高を上回っている岸壁については、マイナス表示と着色により表示している。

